

東京・渋谷駅からの私鉄で西にしばらく行くと、久我山駅。その近くに、ろう者たちが頼りにするラストホープがある。北海道や沖縄からもやってくる。島根からは夜行バスで。

その人は、「テンドー手話・日本語教室」をいとなむ鈴木隆子(53)。日本語教師であり、政見放送に出演できる手話通訳士。日本語を文法的にかみくだいて手話で教えらるるプロは、彼女だけだ。

なぜ、日本語が苦手なろう者が多いのですか？

「ろう者に能力がないのではありません。ろう者の母語は手話で、日本語は第2言語だからです」

つまり、ろう者にとっての日本語は、日本の聴者にとっての英語なのだ。

聴者が自然に日本語を身につけるのは、会話を聞いて

日本語が変？ 第2言語だから



頭から腕をホワホワーンと離していくと、「希望」という手話。鈴木隆子はいう。「ろう者は『見下されるのは自分で最後にしたい』」と思っています。その希望がかなうかどうかは、みなさんの理解にかかっています」=東京の「テンドー手話・日本語教室」

ているから。生後3年間で約1万5千時間、聞くとさける。ろう者は、会話を聞けない。けれど、この社会で生きるため、手話とは語彙も文法もちがう日本語を勉強しているのだ。

だから、たとえば「仕事を終わらせる」を「仕事を終わらせる」と書いても、聴者に笑う資格はない。「助詞」「自動詞と他動詞」「尊敬語や謙譲語」の本語がへん」とバカにされ

る悔しさを知った。

鈴木は思った。(父を選べなかった自分と、聞こえない運命を選べなかったろう者は、同じだ)。鈴木は、自分と母に暴力をふるった父のことが頭に浮かぶと、フラッシュバックで号泣が止まらなくなる。

教室を始めて6年。ろう者たちは鈴木に、職場での苦しみを語ってきた。

ある者は、筆談で文を書いたら、「おまえの日本語、おかしいぞ。学校を出たのか」とイジメられた。ある者は、筆談にも応じてもらえず孤立した。ある者は、上司に配慮を頼んでも、「手間もコストもかかる」と無視された。心の病になる者が多く、退社に追い込まれた者もいた。

鈴木は、ろう者と聴者の懸け橋になろうと思った。出合いの場をつくれれば理解が広がり、社会は変わる。そう信じて交流会に力を入れた。

鈴木は、ろう者と聴者の懸け橋になろうと思った。出合いの場をつくれれば理解が広がり、社会は変わる。そう信じて交流会に力を入れた。

各地の自治体で、手話を言語と認める「手話言語条例」ができてきた。法律にする機運もある。「でも、社会は変わっていません。だって、いま、この瞬間、職場でろう者は苦しんでいるんですよ」

鈴木のもとに、会社に提出する文の添削依頼が後をたたない。おかしな文を提出したら「使えないヤツ」と判断されて査定や昇進に響く、という不安でいっぱいなのだ。鈴木は、自分の無力さに歯ざりしている。だから、世の中に訴える。

「学校で英語を勉強されてきたと思いますが、完璧な英文を書けますか。私はダメ。それと同じです。せめて、日本語が下手だからとろう者を見下すことだけは、やめて下さい」

鈴木に昨夏、ある会社から相談が来た。「わが社の手話部に助言を」。そこでも「ろう者の孤独」を自撃する。(編集委員・中島隆)